これが本当の目からウロコ？

野生動物学研究室講師　南　正人

先日、ある人に頼まれて浅間山の自然の豊かな場所を案内した。私と友人でその二人の方を浅間の南側の林や北軽井沢の別荘地に囲まれた林などを案内した。おもに鳥を見たいということで、軽井沢で有名な観光地にもなっている雲場池に案内した。さすがに冬の軽井沢、路面は凍結し、観光客もいなくて閑散としている。地元の人が数名散歩している程度である。池には、カルガモ、マガモ、オナガガモなどが浮いている。肉眼では遠くてあまりよく見えないが、それでももう 40 年近く野鳥に親しんできた私は、かろうじて見える配色とシルエットで何とか種類も判った。15 年ほど使っている愛器ニコンの双眼鏡を目に当てると、やはり肉眼で見て識別していたカモたちが浮いているのが見える。陽があたり、カモ達の羽色は輝いて、とてもきれいに見えた。

友人が、急に「あっ、カヤクグリ」と声をあげた。私たちの前を小さな鳥が横切って近くの水路の藪に入った。カヤクグリと言えば、地味な羽色の小さな鳥である。さいわい、その小鳥は藪から土手に移り、目視することができた。愛器を目に当てた。「ああ、カヤクグリだ」。その時、「私はこのカヤクグリの微妙な色合いが大好きで、本当に日本人好みの色合いをしていますね。」という声が聞こえた。私は「そうですね」と言いつつ、「そんなにすごくはないような気がするけどなあ」と思っていた。「見ますか？」。三脚に固定された望遠鏡の視野にカヤクグリがとらえられているらしい。勧められるまま、「まあ、見てみるか」と思って望遠鏡を覗いた。

その瞬間、息を飲んだ。「うぉぉぉー。これは何だ！！！」と劇画に出てくるような台詞をはきそうな位の驚き。視野一杯に入ってそこにたたずんでいるカヤクグリの美しいこと。胸の藤色が何ともいえない美しさである。しかも、まるで羽根 1 枚 1 枚が見えるような精度。光学機器を通して見ているのではなく、手の上に載せて肉眼で見ているように見えるのだ。あまりに驚く私に、その人は「こちらでもどうぞ」と双眼鏡を私に渡した。少し重めのその双眼鏡を目に当てた。通常、望遠鏡に比べて、レンズの小さい双眼鏡は、手持ちであるということも合わせて、望遠鏡よりはきれいに見えない。ところが、この双眼鏡でみると、望遠鏡で見るのとまるで同じだ。30cm のところに鳥がいるような精密さで見える。

私は商売道具である双眼鏡にはこだわってきた。国内のトップメーカーであるニコン社の、夕方でも明るく見える倍率とレンズ径の組み合わせの機種を使い続けてきた。1 台目は 15 年程使ったし、２台目も 15 年程使っている。すでに、ストラップを掛ける金属を摩耗してなくなってしまった。今や、この倍率とレンズ径の組み合わせの機種は生産されていないので、壊れるまで使い続けることにしていた。そして、これが本当に壊れた時にお金に余裕があれば、ライカ社の双眼鏡を買おうと思っていた。10 年程前に、知床で肉眼では全く見えない距離からヒグマを観察した時に、わが愛器では何とか見えたヒグマを友人のライカの双眼鏡はクリアに見せてくれたか

らだ。

しかし、今回見た双眼鏡と望遠鏡は、その数段上を行く。いや、光学機器を覗いているレベルではなかった。私は中学生の頃に、今で言うバードウォッチングを始め、双眼鏡や望遠鏡、特に国産のコーワ社の望遠鏡を見て感動した。その時も、今回と同じような感動をした。必死でお金をためてその望遠鏡を買って、毎週末野鳥を見にでかけていた。しかし、いつのまにか、バードウォッチングをしなくなっていた。「鳥はもちろんきれいだけど、何時間もかけて鳥を見る程にはなれないな」。そう思い始めていた。しかし、今回の双眼鏡は、「こんなにきれいに見えるなら、バードウォッチングは本当に豊かな時間だな。」と感じてしまった。

この双眼鏡と望遠鏡は、オーストリアのスワロフスキー社のものであった。どうしてこんなにきれいなのだろう。この会社は、私のように日本の民間企業で働いていた者には理解できない経営をしているらしい。最高の性能を出すことを異常なまでに追求している。数字は正確でないかもしれないが、雇用された職人は３年程見習い期間を過ごし、その間は出荷する製品の製造行程を担当することができない。ネジ１本まで自社設計。ひとつの製品に対して、２年間で数十回の改良を行う。日本なら欠陥が見つかった時以外は、次の設計変更まで改良を行わないだろう。しかも、この会社はそれを自慢げに公告等しない。

例えば、レンズを固定するネジを３個から２個に減らして省力化して光学性能を落とさない方法を見つけても採用しないが、ネジを４個にして光学性能をあげることができる方法を見つけたら採用するという。また、厳密な基準で生産されるレンズの１枚１枚をさらに識別し、いろいろな組み合わせを試してみて最もきれいに見える組み合わせを見つけるというのだ。充分な性能をもつレンズを、さらに最高に能力を発揮する組み合わせで使う。つまり、すべての判断基準が「見やすさ」の追求らしい。徹底した職人魂。今の日本では、個人で物作りをしている職人はまだしも、少なくとも企業には見られない考え方だ。そして、このような過程で発生するコストを価格に乗せる。だから、この双眼鏡の値段は驚く程高い。この双眼鏡の価格は、私の愛器の 10 倍近くする。双眼鏡が数十万円。買う人は限られる。日本ではこのような商売が成り立つと考える人はほとんどいないだろう。しかも、この会社のすべての製品がこのような価格なのだ。

私たちは、いつのまにかコスト/パフォーマンス、あるいは効率というものさしで思考する癖をつけられてきた。得られるパフォーマンスを金額で割るか、時間で割って、その効率を判断基準にしてきた。しかし、そうではない基準があったことを忘れていた。納得できる成果がでるまで、とことんやってみる。そんな価値観があったことを思い出した。しかし、本当の意味の職人や、プロと言われる人はそういう発想をしているのだろう。最近は研究者も効率を求められる時代になった。しかし、職人の発想も捨てたくない。この双眼鏡との出会いでそんなことを考えさせられた。

「こんな双眼鏡を使ったら、動物を見るのが楽しくて、楽しくて、いっぱい論文が書けるなあ」---これは論理の飛躍と責任転嫁。そもそも職人の発想とは正反対。早速、自己矛盾が露呈してしまった。なかなか職人にはなれそうにない。